園のおたより



第　６　号

令和８年１０月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

運動会を通して育つこどもたち

園長　大向　隆三

さわやかな秋風が吹き、園庭の木々や草花にも秋の深まりが感じられる季節となりました。

10 月にはこどもたちが楽しみにしていた運動会が行われました。運動会では多くの保護者の皆様に暖かく見守られながら、こどもたちは体操やリズム運動、さまざまな競技などに、うれしそうに体を動かして取り組み、元気いっぱいに自分を表現する姿を見せてくれました。一人一人が自分の力を発揮し、笑顔で生き生きと活動する姿からは、体を動かすことの楽しさや、みんなで一緒に取り組むことの喜びが伝わってきました。

また、今回の運動会では、友達と協力しながら活動を進める姿もたくさん見られました。同じチームの友達と声を掛け合う際には、組の違いを超えて励まし合い、互いに力を合わせながら取り組んでいました。自分のことだけでなく、友達の様子にも目を向け、困っている友達に声を掛けたり、一緒に頑張ろうとしたりする姿には、こどもたちの心の成長を感じました。運動会という一つの大きなイベントの中で友達と気持ちを通わせながら活動する経験は、こどもたちにとって大切な学びの機会になったことと思います。

さらに、友達が競技に取り組む姿を一生懸命に応援するこどもたちの姿も印象的でした。友達の頑張りを自分のことのように喜び、「がんばれー！」「もうすこしー！」と大きな声援を送る一方で、「自分もやってみたい」「次は自分も挑戦したい」などと意欲や積極性が感じられる発言も多くありました。友達の姿に刺激を受け、新しいことに興味をもち、自分から挑戦しようとする気持ちが育っていることを、大変頼もしく感じました。

幼児期のこどもたちは、遊びや生活の中で、さまざまなことに出会い、心を動かしながら成長していきます。運動会での経験も、体を動かす楽しさに加え、友達と力を合わせる喜び、相手を応援する優しさ、そして自分から挑戦する意欲など、多くの学びにつながっていることでしょう。

これからも、一人一人のこどもが自分らしさを発揮し、友達と関わる中で互いのよさを認め合いながら、さまざまなことに自分からすすんで取り組めるよう、日々の保育を大切にしていきたいと思います。運動会で見せてくれたこどもたちの輝く笑顔と頼もしい姿を、これからの園生活にもつなげていきます。



段ボールと新聞紙

副園長　小谷　宜路

こどもたちは遊びの中で、いろいろな素材、材料と出会っています。少し大きなものを形作りたいときに、真っ先に思いつくのが「段ボール」です。今月の保育の中でも、１組は、絵の具で描いたキリンを段ボールに付けて、しっかりと運べるようにしたり、段ボールを大きな木の形に作ったりしています。２組では、電車を走らせる線路を長くするときに、段ボールを細くつなげたり、ポップコーンのごっこをするために、段ボールを切ったり貼ったりして大きな鍋に見立てたりしています。３組では、運動会に向けて、宝箱、海、カマキリ、うさぎ、びっくり箱、魔法の乗り物など、コースのイメージを広げながら、段ボールで作ったり、運動会以外にも映画館の壁や扉として段ボールを使ったりしています。こどもたちにとって「身近な」材料の一つです。ところで、かつての保育を思い返すと、段ボールはそれほど身近ではなく、必要な時には、近隣の店舗に出かけ、分けてもらっていました。今は、保育で必要な物品を購入する際、園まで配送してもらえる場合が多く、大小さまざまな段ボール箱が、園にあります。こどもたちは、必要になると用務員さんのところへ尋ねてきて、ストックされている段ボールから選んで嬉しそうに抱えて遊びへ帰っていきます。

保育の中で、かつて「身近な」素材だったものの一つに、「新聞紙」があります。絵の具等で描く時の下敷きに使うだけでなく、砂や粘土と同様に、感触を楽しむ素材として、ちぎったり丸めたり、大きなお風呂のように新聞紙いっぱいに体をうずめたりする遊びをしました。立体的に形作りたいときの型の土台にしたり、強度をつけたいときの芯にしたりすることもありました。一時期にたくさんの新聞紙が必要になることもありましたが、生活の中で情報を得る手段として、新聞が主たる方法の一つだったこともあり、新聞紙は容易に手に入る「身近な」素材でした。今はすぐに多くの新聞紙を集めることはしにくくなっています。

物の購入が店舗に行く形から配送してもらう形になる、情報の取得が新聞からインターネットになる、といった社会の仕組みの変化は、こどもたちの遊びにとって、何が身近な材料となるかという変化にもつながっています。他にも、手洗いの際、ポンプ式の液体石鹸が主流になり、園でも固形石鹸は使わなくなりました。「石鹸箱」は、その大きさや紙の厚さが、切ったり貼ったりしやすいのですが、こどもたちが作る材料として今は「身近な」材料ではなくなってきました。

少し大きな話になりますが、こどもの遊びは、人々の文化や暮らしと、とても密接に絡まっているのだと改めて感じます。



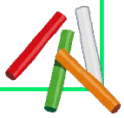
クラスだより

１くみ

「つながりの広がり」

先日は心地よい秋の空気の中で、保護者の方にもご参加いただき運動会を行いました。友達と体を動かすことが嬉しかったり、少し緊張していたり、いろいろな姿がありました。運動会前にも３組が考えてくれた種目を何度も試したり、２組や３組と一緒に体操をしたりリズムを見合ったりするなど、なかよしグループの友達とも関わりの機会が多く、嬉しそうな姿が見られました。運動会後には、なかよしグループの友達を見つけると、「私のおねえちゃんだ！」「僕のなかよしだよ」と嬉しそうに話したり駆け寄ったりする姿があります。３組や２組の友達が声をかけてくれたことをきっかけに、リレーもしています。優しくやり方を教えて促してくれたり、寄り添ったりしてくれることで、初めてのリレーでしたが、喜んで思い切り体を動かす姿がありました。運動会当日を思い出して「これパパたちがやっていたやつだよね」と嬉しそうな人もいました。

運動会に向けて取り組んだことをきっかけに、クラスのいろいろなところで友達と関わることが増えています。いつも決まった友達というわけでもありません。今までにも、お互いの名前を嬉しそうに呼び合う姿がありました。最近では、より積極的な関わりになり、ある人は朝着替えている時から「今日〇〇ちゃんと遊ぶ」と楽しみに話す姿がありました。着替えを終えて戸外に出ると、早速先に着替えた友達を探して駆け出します。さらにそこへ、別の友達が「一緒にバッタ探そう」とやってくると、「〇〇ちゃんと〇〇くんと遊ぶ！」と嬉しそうな姿がありました。これは一つの場面ですが、いろいろな友達のよさを感じて関わろうとする姿を大切にしています。



２くみ

「体を動かしてつながる」

今月は、学級のみんなと体を動かすことを繰り返し楽しんできました。友達の姿に目を向けたり、応援で気持ちを届けたり、友達からの応援を嬉しく感じたり、体を動かすことを通して、気持ちもつながっているようでした。

３組の姿に刺激を受け、綱引きをやってみました。３組の姿を思い出しながら赤（梅干しチーム）と白（ごはんチーム）に分かれ、いよいよ勝負が始まります。何度も繰り返し、僅差で梅干しチームが負けてしまうと、悔しくて涙を見せる数人がいました。気付いた人は「どうして泣いているの？」と初めは不思議そうにしていました。「負けて悔しい」という気持ちを話題にすると、側で気持ちに寄り添う人、「明日もやろうよ」ともう一度やることを提案してくれる人、こっそりコツを教えてくれる人など、それぞれのやり方で悔しさを受け止めていました。相手の気持ちに気が付き、勝って嬉しいだけでなく、“悔しい”という気持ちも大切にしようとする姿がありました。

運動会の後には、保護者の方の姿をきっかけにリレーをしてみました。初めはバトンを使わずタッチで交代しました。前の人が走っている姿を見て、両手を広げて待ったり、名前を呼んで迎えたり、次の人と素早く交代できるように考えて動いたりしていました。何度かするうちに自然と同じチームの人と「えい、えい、おー！」と揃えたり、スタートの合図が聞こえると走る人を応援する声が出たり、だんだんとチームの気持ちが一つになっていきました。遠足の日、埼玉大学のグラウンドでリレーをした時に「バトンがあったらもっと面白いのに…」と呟いていたので、翌日、バトンを出しておきました。初めは数人でリレーを始めていましたが、室内まで応援や走る姿が届き、「ちょっとリレー手伝ってこようかな」とどんどん人が集まり、何度も何度も走ることを楽しんでいました。

運動会や遠足で友達と経験を共にしたことが、普段、遊ぶことが少ない人の姿に目を向けたり、一緒に遊んでみたりするきっかけになっているように感じます。これから寒さを感じる季節となりますが、体を動かしてつながることも大切にしていきたいと思います。



３くみ

「友達と友達の間に生まれたこと」

２学期になって新しいグループでの活動をする中で、運動会に向けて５グループで活動をすることにしました。それぞれの色からイメージを膨らませて、「たまごずし」、「かまきり」、「ももアイスクリーム」、「ぶどう」、「うみ」という名前を付けました。前の３組さんがしてくれたことを思い出して、今度は自分たちの「みんなであそぼう」をつくれることに気づくと大張り切りで、いろいろなイメージを形にしようと膨らませていました。自分のイメージを友達に伝えることの嬉しさや難しさ、自分の意見だけを通そうとすると友達が暗い顔になって楽しくないこと、みんなと息を合わせるには友達の思いや考えをよく聴くことが必要であること、考えたり困ったりすることも大切だけれど同時に試すことも大切なこと、「そんなの嫌だ」は言えるけれどアイディアが浮かばなくて進まないこと、面白い、楽しいという「あそび」を作る中には、いろいろなことがありました。「困る」ことも、大切なことにわたし自身も気づきました。そして、お試しをする中で、他のチームの３組の友達や１組、２組の友達が楽しそうにする姿を感じたことも、もっとあそびを面白くしようというエッセンスになったと思います。困ること、嬉しいこと、満足感、いざこざ・・いろいろな思いが重なっていくうちに、自分や友達の新たな持ち味に気づくこともあり、友達との関係も深まっていきました。それは、ラジオの周波数を合わせようと個々にチューニングするように。

運動会を終えて、こどもたちの表情に自信が漲っていることも感じます。行事については、その日の出来映えではなく、幼児の「生活を変化と潤いのあるものにすること」が大切と言われています。変化や潤いとは何かと考えています。３組さんも、それぞれが変化しましたが、例えば、これまで控え目な自分の表し方をしていた人がドロケイでずるいことをして友達を困らせる姿も見られます。これはポジティブな変化として捉えられないように感じるかもしれませんが、実は、友達との暮らしの中で、面白いことを生み出している大切なエッセンスになると思うのです。こどもたちの困る姿を聴きながらも、これが潤いかもしれないと、ひそかに嬉しさを味わっています。

